

関東及び周辺地域における災害石造物・伝承、祭祀施設等の調査研究と課題

Investigation research and problems of disaster monument, tradition, ritual facilities etc in Kanto and the surrounding area

大里重人¹

1 株式会社土質リサーチ

概 要

災害が起こると。その被害の犠牲者を供養あるいは災害への対応を記念して石造物や伝承、あるいは祭祀施設等の造営が行われることがある。これらの施設や伝承は、その地域の災害特性を示すために重要な示唆を与え、近年では地理院の地図に記載されるようになってきた。しかし、その分布や石造物の保存、あるいは伝承の記録・研究では、課題点も多く、研究の支障となる場合もある。本発表では、関東における災害石造物や伝承、あるいは祭祀施設の分布についてその課題点を洗い出し、今後の議論の方向性を提示するものである。

キーワード：自然災害伝承碑、災害特性、歴史遺産

1. はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災以降、災害碑や災害伝承地や石造物に関する記載や研究は大きく着目され、歴史学や工学、防災、宗教学、民俗学をはじめとして、様々な研究者により実施されてきた。¹⁾

歴史学や民俗学においては、災害碑に特化されたものではないものの、各自治体が実施した石造物調査報告書が古くから各所で刊行されている。しかし、災害というカテゴリでこれらの報告書を検討してみると、災害現象とそれに対する人間の関係を科学的に包括して体系づけるような研究はあまり見受けられない。

石造物だけを取り扱って見たとしても、災害に関する碑は様々な形態（構造）をとっており、慰霊や記念、祈念といった心の部分まで整理すると、災害の教訓としての取り扱いの対象物によりかなり異なる。

地名や伝承や儀礼、祭祀などのように、構造物を残さないで地域に警告を与え続けているものも多々ある。

近年は国土地理院では、令和元年6月19日より国土地理院のウェブ地図「地理院地図」から掲載を開始し、地図情報に自然災害伝承碑の位置が記載されるようになってきている。²⁾

しかし、このような検討なしに碑の位置の提示や防災意識の高揚を行おうとしても、いくつもの課題が生じることが予想される。

本報告はこのような点に鑑み、関東地域及び周辺における災害石造物・伝承、祭祀施設等について整理し課題点を

抽出したものである。

2. 災害石造物・伝承、祭祀施設等の分類整理

災害石造物・伝承、祭祀施設等の分類は、様々な分類・整理方法があるが、災害という切り口で見た場合には一番大きな分類項目は、災害カテゴリー（災害種別）による分類であろう。図1は、現在までに関東及び周辺地域の災害石造物・伝承、祭祀施設等について、文献収集や現地調査・確認により関連する事象を取りまとめたものである。ここで示した各災害のカテゴリーは、表1に示した分類による。

2.1 災害カテゴリーについて

表1は災害石造物・伝承、祭祀施設等の関東地域外も含めた調査で収集した結果を整理したものである。

調査は、既存の石造物調査報告書やインターネットによる検索、あるいは郷土史誌等の検索を行い、現地調査による位置の確認、GPSによる位置の確定、報告書との既存資料がない地域においては、その地域の墓域調査、現地聞き取りを行い、各地域の災害石造物・伝承、祭祀施設等の採集を行っている。

分類項目の基本は、地域防災計画の項目（対策編の分類）におおむね一致させているが、災害現象そのものや、複数の災害が加味されている災害石造物・伝承、祭祀施設等もあるため、ここでは表の備考に示した理由及び考え方等で分類・整理している。

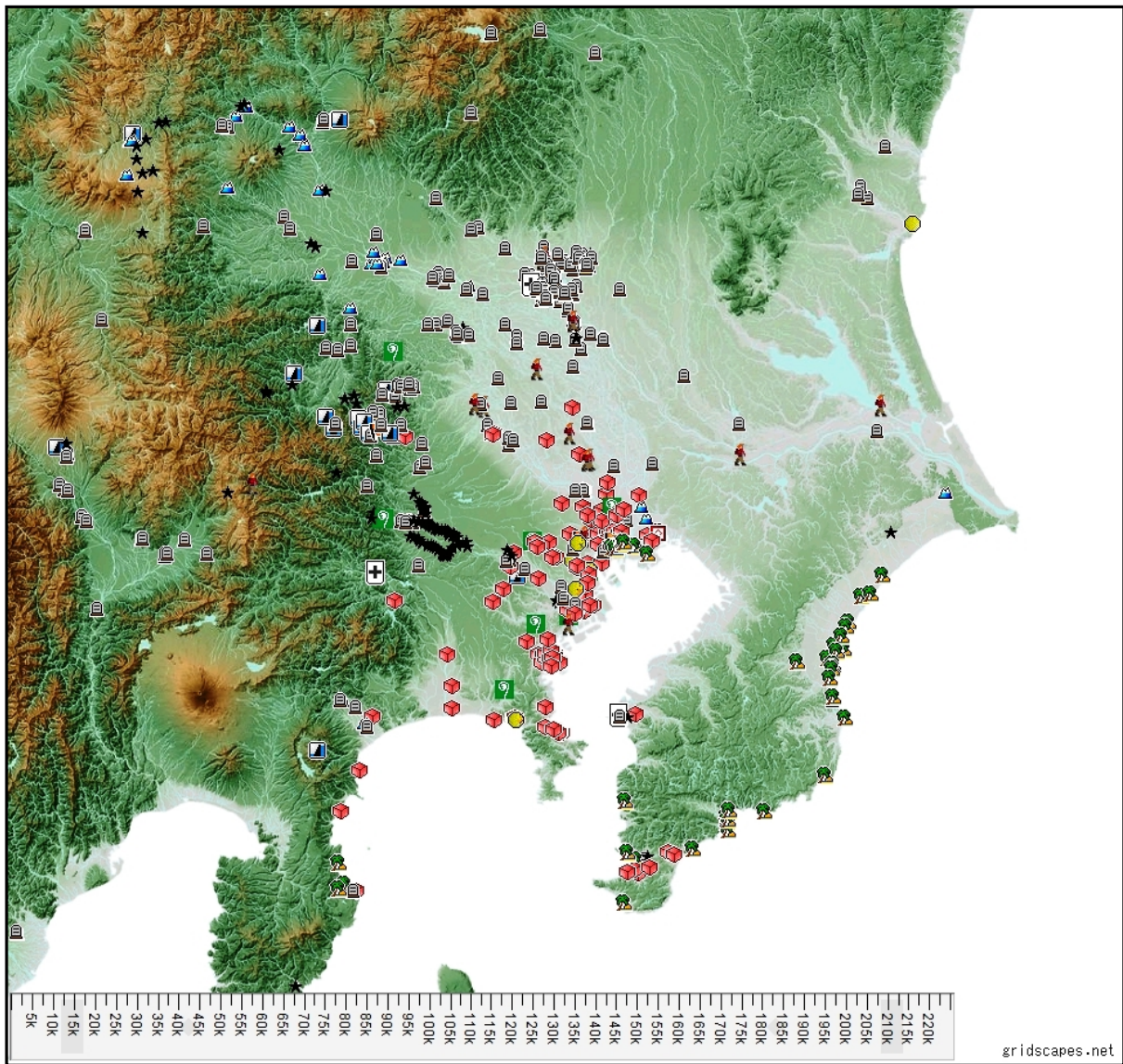


図1 関東地方及び周辺地域の災害石造物・伝承・祭祀施設等の分布例
(図中のアイコン凡例は、表1を参照)

表1 碑及び口承等の災害カテゴリー分類表

記号	碑等関連災害分類項目	備考
	水害	長雨・台風による水害，火山泥流・高潮等を除く
	沿岸水害	高潮・津波：火山性・山体崩壊性津波を含む
	土砂災害	崩壊・土石流・地すべり，火山泥流を除く，実験事故を含む
	地震	揺れ・火災：津波被害を除く
	火山	泥流・噴火・水蒸気爆発による火山性崩壊を含む，山体崩壊による津波は沿岸災害に含める
	風害	波浪による船舶事故・竜巻・暴風被害・風台風を含む，暴風雪は含まない
	雪害	雪害に伴う列車事故を含む
	飢饉・干害	日照り・長雨による飢饉，旅先行倒れは含める
	パンデミック	コレラ・疱疹等の伝染病
	大規模火災	地震由来を除く
	大規模事故災害	列車・航空機・大規模自動車事故・イベント事故等
	建設事故災害	建設に係る労災事故，災害現象実験事故を含まない
	人物	治水者，功労者，被災経験伝承者等の墓ないし伝承地，顕彰碑は，災害対応が多岐にわたる場合もあるので包括する
★	その他対策・抑止，地名・口承・実績地，事象等	地盤沈下対策など上記に含まれない対策，災害関連地名，口承，伝承地，災害実績地，災害発生の痕跡が残されている事象など

2.2 災害石造物・伝承、祭祀施設等の分布

災害石造物・伝承、祭祀施設等の分布は、図1に示したとおり、地域性を反映した分布を示している。

軟弱地盤が発達した沖積低地の地域では、地震に関する災害石造物・伝承、祭祀施設等の分布が確認される。

高潮や津波等に関する災害石造物・伝承、祭祀施設等の分布は、当然のことながら沿岸地域に多く分布し、土砂災害に関する災害石造物・伝承、祭祀施設等の分布は、丘陵地や山岳地に多く分布する。

水害に関係した災害石造物・伝承、祭祀施設等の分布は、河川沿いの内陸部や台地内の開析谷内に多く分布している。

火山に関する災害石造物・伝承、祭祀施設等の分布は、火山山体周辺にとどまらず、泥石流等の流下する地域や降灰の分布する地域、あるいは火山が遠望できる地域で確認され同一火山噴火に関連した災害石造物・伝承、祭祀施設等の分布域は広い。

注目すべきは、水害に関する災害石造物・伝承、祭祀施設等や火山災害の泥石流に起因する災害石造物・伝承、祭祀施設等の分布である。

これらの災害石造物・伝承、祭祀施設等は、人的被害があった主地域から、遠く離れた地域に流下～漂着して漂着した地域で慰霊あるいは神として祀られたものである。

漂着した木材や仏たちは、漂着神としてあがめられ漂着した地域の守り神として祀られる。

たとえば、多摩川流域の川崎市平間にある八幡大神や浅草の浅草寺観音などがその例である。

八幡大神は、調布ないし府中から洪水で流出した社の部材が平間の河原に流れ着きそこで祀られたもの³⁾、浅草寺の観音像は、東飯能にある岩間観音堂^{写真1)}で崩壊・流出した観音像が、浅草寺近くで網にかかり祀られたものという。^{4) 5) 6)}

同じように、被災地域と異なった地域に災害石造物・伝承、祭祀施設等が設置されている場合もある。たとえば大正関東地震時における高麗川上流部の吾野にある供養碑である。



写真1 漂着神の例：岩間観音堂と浅草寺

吾野付近は大正関東地震時に全くと言ってよいほど被害を受けていない。この地域は江戸時代から都市部への木材の供給地域にあたり、江戸などの都市部で火災などが起こると復興のための木材の供給地となっていた。

大正関東地震の際にも、この地域から被災した都市部へ多くの木材が供給されたという。供養碑は、そんな経済的なつながりのある地域の人たちの大きな災害に対する心象を表したもののようだ。

このように、災害石造物・伝承、祭祀施設等の成立やその意味を把握するためには寺社・碑などの設置・勧進動機が重要になる。

2.3 寺社・碑などの設置・勧進動機

表2に寺社・碑などの設置・勧進動機を取りまとめた。

寺社・碑などの設置・勧進は、様々な心の動きにより設置されるものだが、動機が変わればその災害石造物・伝承、祭祀施設等の意味合いも変わるし、防災教訓としての取り扱ひも異なってくる。

たとえば建設開始時の地鎮祭や社の建立は、祈念・祈願になるし、建設事故等での碑建立は異例・供養に、竣工を記録する碑の建立は記念になる。施工や資金等に貢献した人を顕彰する場合もあるだろう。

これに対し、災害での被害が二度と起こらないようにとその場所を提示するための碑等は、子孫への警鐘である。

このように災害伝承に関する施設を調査する場合は、それぞれが設置された動機に関しても整理しておく必要があるといえる。

表2 寺社・碑などの設置・勧進動機

動機の種類	
慰霊・供養	供養、年忌
	心象供養
警鐘	
祈念・祈願	雨乞い
	災害除け
	安全
	救済・感謝
記念	災害記録
	復旧・復興の記録
	救済記録
顕彰	功労・顕彰

3. 災害伝承の形態

災害伝承は、自然災害碑だけでなく様々な形態で保存される。表3は、災害に関する伝承の形態を分類整理したものである。ひとからげに災害伝承と言っても碑もあるし寺社や祠の建立もあるだろう。構造物を残さず口承（口伝）のみの場合もある。地名として残される場合もある。構造物はあるが、由来が口承のみの場合もある。近年では、災害で発生した流下物や飛来物、あるいは被災した構造物自体を保存する場合もある。

すべての形態を、総合的に自然災害の伝承として調査・記録、保存、知識の普及を行い、総合的な提示・知識の普及を図る必要があると考える。

表3 伝承の形態分類表

形態分類			備考
大分類	中分類	小分類	
石造物	慰霊碑・供養碑	文字碑	被災発生地の碑は含まない
		如来・菩薩・観音・地藏	薬師如来, 虚空蔵菩薩・如意輪観音・聖観音・馬頭観音など祈願仏
	刻印・実績記録刻字	水位実績・岩塊流出実績	警告を含む, 災害発生物に刻印・刻字された一部の文字碑を含む
		災害防除・復旧・復興記念	
	記念碑・治水碑	被害実績記録	
		サエのカミ (塞の神)	道祖神・フセギ・青面金剛 ・猿田彦など
	墓石・顕彰碑	被災者や功労者の墓・顕彰碑	人物
被害の発生地 ・被災発生物	災害発生箇所・流出岩塊等	石碑あるいは文字記載のある災害現象残存物	
寺社・祠	水神・龍神・九頭龍	災害除け・水害防禦願望	「たとうさま」等のように命名されたものもある
		水源神	例えば水源地の水天宮など
		漂着神	たとえば浅草観音
	弁天・宇賀神	水源神	例えば水源地の弁天など
		災害神	水神
	稲荷		水神としての伏見稲荷など
	金毘羅		水神・交通安全としての建立
	白山		水神としての建立
	スサノウ		アラヒトガミとしての災害への恐れ
	薬師堂		遣い：龍神 救い 水神
	妙見堂		遣い：ウナギ 救い 北辰尊星妙見菩薩・虚空蔵信仰 水神
	観音堂		被災した人への救い
	地藏堂		被災した人への救い
	慰霊堂		被災した人の慰霊
	胎内洞窟		如来, 菩薩, 観音, 四国・坂東観音など
疱瘡神		疫病除け(パンデミックへの恐れ)	
口承 ・伝承	伝説・民間伝承		ex) ダイダラボッチ・寺社由来・対策用資材供給地・破堤箇所・崩 壊箇所・要石・被災者埋葬地, ウナギ, 龍, 人柱, 寺社建立由 来等
	地名		ex) 地形・災害由来の地名等
	祭り・民間芸能		ex) 龍神祭り・大蛇祭り・虫送り
	禁忌		ex) 妙見信仰(ウナギを食さない)
被災及び 対策構造 物, 災害 現象	被災建築物		ex) 地震・津波・土砂災害被害建物跡等
	被災土木構造物 ・対策構造物		ex) 堤防・砂防堰堤等
	祈念奉納額等		ex) 堤防等の安全祈願奉納額等
	災害現象		ex) 流出残存物, 堆積物, 飛来物・破堤記録箇所等
	建築・宅地形態		ex) 水塚・耐震構造

表3に示した伝承形態の分類については、次のように整理されると考える。

3.1 石造物

石造物といっても文字碑の場合もあるし、地藏や観音といった礼拝物の場合もあるし、自然石等に刻まれたものもあるし、様々な形態がある。

また前節で記載したように石造物を建立した時点での動機の違いがある。

それは動機の違いにより石造物が設置される場所に違いが生じることに影響し、さらには災害への警鐘の意味合いも異なってくる。

たとえば慰霊の場所の場合は、被災した場所の場合もあるし、死者が再び被災してもらいたくないという願望から慰霊碑の位置がわざわざ高台や被災しにくい場所から慰霊すべき被災した場所を見渡せる場所に建立する場合もある。こうした場合には、心象により石造物が建立されるため、被災者が発生していない地域においても石造物の建立が行われる。

災害で発生し残存した岩石塊に、直接警鐘の言葉や水位を刻むのはより警鐘が積極的な石造物である。被災実績碑も同様に位置づけになる。

なお石造物は、建立後の土地開発や道路等の構造物の構築により移動されることが多く、元位置の把握、記録、後世への伝承が重要である。当然のことではあるが、石造物の元位置と移動された場所では、石造物が持つ動機や警鐘の意味合いが全くなくなってしまうからである。

今後地図記号等で表記する場合も元位置であるかどうかを把握したのち追記しておくことが望まれる。

また文字碑の場合は、風化に伴う碑文の劣化が生じ、碑自体の保存対策あるいは、ひかり拓本データベース-津波碑拓本データベース- (2019)⁷⁾のような碑の文字情報を3D撮影、あるいはレーザー記録したデジタル記録も今後重要となってくるものと考えられる。

3.2 寺社・祠

寺社や祠は、祀られる礼拝物により意味合いが異なってくる。また寺社や祠が建立されている位置によってもその意味合いは異なる。礼拝物の違いは、石造物と同様に建立の動機につながり、寺社・祠の持つ警鐘や祈り、恐れへの祈願、役割と言った地域社会との繋がりにも影響する。

その寺社や祠で行われる年中行事や民間信仰、民間芸能が、その地域の災害伝承を補完している場合もある。

たとえば虫送り(虫害対策)のように、災害対策が年中行事と行われる場合もあるし、龍神や蛇神の造形物を持ち出し神輿として祭りの時に駆り出す神事もある。

それらの祭りをただ祭りとして見るだけでなく、祭りの生まれた意味合いを再確認することが、自然災害の伝承には重要になるものと考えられる。

寺社や祠の由緒に関する収集・整理分類も重要である。

寺社や祠の由緒は、口承であることも多く、伝承の不確かさも伴う。たとえば前述した平間の八幡大神であるが、洪水伝承がその由来にあることされているが、流出したとされている調布にある神社の位置は、段丘崖の上や河川から離れた地域にあったりする。上流部の洪水被災伝承がある他の神社も多摩川流域には存在する。このような神社の由来伝承は口承であり、伝わってくる過程で内容が変質してしまう場合もある。

洪水シミュレーションや流下実験なども一つの証明手法になるのだろう。

今後、歴史学や民俗学、古文書学、宗教学等を巻き込んだ、総合科学的な検証・整理が必要なのだと考える。

3.3 口承などの伝承(地名由来を含む)

口承は文字記録ではなくその地域に、人から人へと口伝されてきた過去における事象や構造物等の由来、あるいはその地域の人の自然災害等への対応の仕方、やってはいけない事柄に関する禁忌など玉石混合。不確かな伝承もあれば、地域特性を表すものもある。後に科学的に証明された伝承もあり取り扱いはなかなか厄介である。

しかも文字記録ではないため、伝承の過程で内容が変化・変質してしまうこともある。このことは地名の由来も同様である。地名の由来は、口伝であるものが多い。

近年災害と地名との関係に着目し、その土地の履歴を地名に求めるといったブームが生まれている。しかし地名の由来には言語学的な意味合いを含むものもあり、一概に自然災害や地形と単純に結びつけることができないものもある。禁忌についても同様である。禁忌については、科学的な証明がなされ現代でも重要なものもある。

図2は明治44年以降に東京市下谷区下根岸の町会で張り出されたという災害標語の事例であるが、標語の内容を精査すると現在でも同様の対応をとることが良い標語もあれば、ちょっと考える必要がある現在では対応に注意が必要なものもある。地形形成にかかわるダイダラボッチの伝承や、妙見信仰が伝わる地域では、洪水を神が伝えるウナギを食してはいけないという地域もある。

このような口承や禁忌は、迷信のようにとらえられる場合が多いが、災害に対する示唆を与えるものもある。

単純に迷信として評価してはならず、やはりその意味合いを科学的に解釈しておく必要がある。

考古学的手法による証明や地形学的手法による検証や研究、気象学による検証や研究も一つの手だろう。

またこれらの伝承については、口承であるため記録保存しておかないと、意味がある伝承であったとしても、伝承者がいなくなれば、将来伝承は失われてしまう。

伝説、禁忌、由来など、口承の記録保存、理学・工学あるいは心理学や民俗学、歴史学の視点からの研究が重要である。

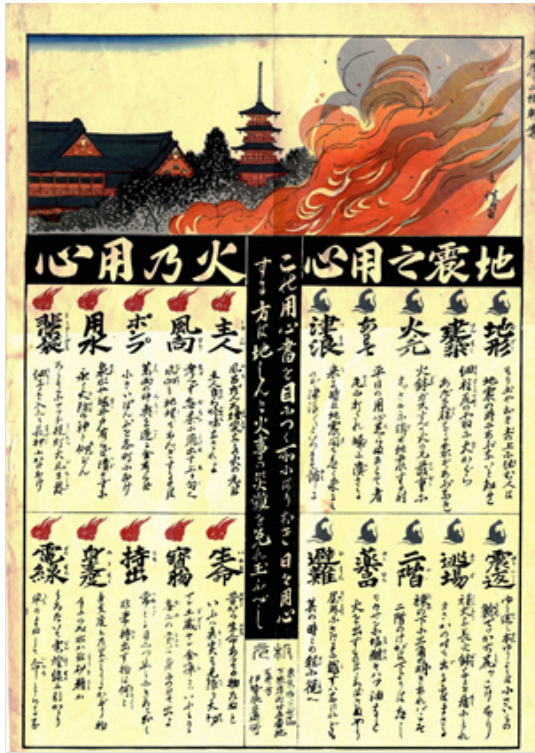


図2 東京市下谷区下根岸の防災標語（筆者所蔵）

3.4 被災及び対策構造物、災害現象

災害現象の残存した堆積物が、その場所に口承と伴い保存されていることがある。たとえば天明浅間火山の流出岩塊や高麗川の「大岩」のような明治43年の水害に伴う崩壊堆積物などがその一例としてあげられる。

噴火の経緯を見ることができ火山噴出物が露頭として保存されている場合もある。たとえば天明浅間噴火の火山灰露頭などである。地震時や土砂災害の場合は、被災した家屋や構造物で倒壊を免れたものがそのまま残存し、保存されている場合もある。

たとえば地震時の場合は、大正関東地震時に被災した露重銀行あるいは80番館遺構、土砂災害の場合はカスリーン台風の際に土砂の直撃を受けた赤城町深山の蔵などが代表的な例と言えよう。

これらの構造部の場合、被災の状態や被災に至った外力や被災過程を知るうえで極めて重要な伝承物ではあるが、壊れたままの状態を維持し、保存することは、見学者の安全性確保や構造物の劣化をくい止める方法、維持管理にかかる経費、被災直後の構造物の場合被災者の心情など、技術的・心理的・経済的な課題も多い。

さらに、これら被災構造物から破堤や構造物破壊等の外力を解釈する場合には、当時の建設方法や考え方、性能規定などについても把握しておく必要があるのだと考える。

これらの被災当時の構造物の設計思想や性能規定、あるいは構築法は、口伝書や教範あるいは家訓⁸⁾など当時の文献による調査が重要である。

一方、文献の解読には、工学研究者や理学研究者が直接読めることが理想であるが、くずし字が翻刻された文章を

読むにしても慣れていないとかなり難しい。国文学や言語学、歴史学の研究者との連携が重要である。

4. まとめと課題

以上の事から、災害伝承に係る各項目について現状と分類、或いは課題点の指摘を行ったが、これらの事を整理すると次のとおりである。

1) 自然災害碑や寺社・祠、被災現象の研究課題

調査あるいは今後の整理を行う上で、調査者が共有できる災害カテゴリー（災害分類）が必要である。

この時には碑の建立動機や初期位置情報や移転情報などを含めたGISによる記録、データベース化が重要なのだと考える。

また、碑の劣化などの碑の保存方法に関する研究も重要な課題である。近年3Dデジタル記録による記録保存方法も取り扱いやすくなっている。

記録保存方法の研究も重要なテーマだと考える。寺社・祠に関しては、歴史学や民俗学、宗教学との連携が重要である。

建設従事者は、構造物の構築開始時に地鎮祭などを行う場合も多く、宗教学や民俗学との連携は本来なじみがあるはずである。

2) 口承などの伝承の課題

口承の場合、記録がないだけにその取扱いは注意が必要である。しかし口承は、過去の災害の本質を示唆しているものもあり、やはり科学的な検証が重要な課題であると考えられる。禁忌についても同様である。これらの研究を行うに当たっては、他の学際との連携が特に重要になると考える。

3) 総合的な課題

災害伝承については、前述している通り総合科学としての研究が重要である。災害は、人がいなければ災害にならないからである。

今後、他の学際との連携強化が望まれる。

参考文献

- 1) 各自治体刊行の石造物調査報告書、災害史に学ぶ。中央防災会議『災害教訓の継承に関する専門調査会』編、武村（2017）ほか多数
- 2) 国土地理院ホームページ自然災害伝承碑, 2019.
<https://www.gsi.go.jp/bousaichiri/denshouhi.html>
- 3) 平間八幡大神由来看板（口承）
たとえば、神奈川県神社庁HP
https://www.kanagawa-jinja.or.jp/search_dtl.php4?jid=30&cd=1201030&scd=&npg=1
- 4) 岩井堂観音由来看板（口承）
- 5) 浅草寺HP、浅草寺の歴史、ご本尊の示現
<http://www.senso-ji.jp/about/>
- 6) 浅草寺へ西川材の長椅子 飯能のPRにも一役、文化新聞, 2017
<http://www.bunkashinbun.co.jp/wp/2017/10/13/>
- 7) 上相ほか、東北大学HP、ひかり拓本データベース（津波碑拓本データベース）、2019.
<https://takuhon.lab.irides.tohoku.ac.jp/>
- 8) たとえば伊奈家法地方伝記など
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2541258/1>